

2022 年度（令和 4 年度）事業報告書

本事業報告書は、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律第 199 条により準用される同法第 123 条第 2 項に基づき、当財団の状況に関する重要な事項を記載した事業報告として作成されるものである。

I. 2022 年（令和 4 年度）事業の概要

2022 年度（令和 4 年度）事業計画における基本方針は以下のとおりであった。

当財団は、本年度が事業の初年度であることを踏まえ、以下の事業及び活動を行うことを基本方針として、以下のとおり事業計画を策定する。

- ①絹谷幸二芸術賞の創設に向けた事業（事業目的(1)）
- ②講演会、講習会を通じた美術教育の向上並びに普及啓発活動（事業目的(2)）
- ③画家絹谷幸二作品の貸出、資料・学術研究の提供による美術教育の向上並びに普及啓発活動（事業目的(2)）

また、2023 年度中に公益認定申請を行うことを目標として、その準備作業（組織体制および内部規程等）の整備を行う。（事業活動(3)）

さらに、当財団事業の社会的意義が広く認知されるように、一般社団法人絹谷幸二美術財団のホームページ制作のための準備をおこなう。（事業活動(3)）

上記の基本方針の下で、本年度において実施した、主要な事業は以下のとおりである。

1. 顕彰事業

当財団は、2022 年度（令和 4 年度）事業計画において「顕彰事業活動として 2009 年～2018 年の約 10 年にわたり 35 歳以下の若手芸術家を応援し、具象絵画の可能性を開くことを目的にして実施された絹谷幸二賞（毎日新聞社主催）を前身として、新たに「絹谷幸二芸術賞」を創設する。」としていた。

2023年1月、当財団は、上記事業計画に沿って、「絹谷幸二芸術賞」を絹谷幸二芸術賞実行委員会、産経新聞社とともに主催し、創設した。(チャーム・ケア・コーポレーション共催、サクラクレパス協力。)

絹谷幸二芸術賞の内容

対象作家： 40歳以下の平面作品（具象傾向）を発表していること
選考方法： 絹谷幸二芸術賞実行委員会が選出した全国の美術館学芸員、大学教授、美術関係者、ジャーナリストなどの識者にそれぞれ作家の推薦を依頼。その推薦された資料をもとに選考委員による第一次審査を実施し、選出された約10名の中から最終審査で大賞および奨励賞の2名を選出する。

賞金及び賞品：

大賞	1名	賞金	100万円	副賞	サクラパレス画材
奨励賞	1名	賞金	50万円	副賞	サクラパレス画材

選考委員の候補者選定：

絹谷幸二（画家・絹谷幸二美術財団理事長）
建畠哲（多摩美術大学 学長）
島敦彦（国立国際美術館 館長）

絹谷幸二芸術賞 Website 設置：<https://kinutani-award.art/>

令和5年 1月 絹谷幸二芸術賞 産経新聞告知

<https://www.sankei.com/article/20230130-4Y7IZPWH3JNW5NX45DFVF46S3E/>

2. 講演会、講習会を通じた美術教育の向上並びに普及啓発活動

当財団は、2022年度（令和4年度）事業計画において、「美術に関する講演会、講習会等を行い、美術教育の向上並びに普及啓発活動を行い、もって美術の発展に寄与する。具体的には、講演会資料、教育プログラム制作・補助、協賛等を実施する。」としていた。

2022年4月1日以降、当財団は、上記事業計画に沿って、絹谷幸二氏に委嘱し、上記事業を行い、又は支援することにより、美術教育の向上並びに普及啓発活動を実施した。実績の一覧は以下のとおり。

① 絹谷幸二天空美術館における諸活動への協賛

- ・絹谷幸二天空美術館 「2022 第一回キッズ絵画コンクール」
応募資格 小学生～中学生以下

審査委員 絹谷幸二 堀内陽介 南城守
表彰 賞品・記念品の贈呈
表彰式 2022.4.29 絹谷幸二天空美術館

応募作品合計 3,009 点

絹谷幸二キッズ賞グランプリ 榊井さん (小学校 4 年生、山口県)
絹谷幸二キッズ賞 優秀賞 池田さん (小学 1 年生、広島県)、大倉さん (小学
5 年生、静岡県)、遠藤さん (中学 3 年生)

絹谷幸二キッズ賞 館長賞 伊藤さん (小学 6 年生、愛知県)

佳作賞 22 点 入選 13 点

4/29～6/27 受賞作品の作品展示 (天空美術館)

・ 絹谷幸二天空美術館 「2023 第二回キッズ絵画コンクール」

応募資格 小学生～中学生以下

審査委員 絹谷幸二 堀内陽介 南城守

表彰 賞品・記念品の贈呈

表彰式 2023.3.19 絹谷幸二天空美術館

応募作品合計 1,796 点

絹谷幸二キッズ賞グランプリ 浅井さん (小学校 6 年生、東京都)
絹谷幸二キッズ賞 優秀賞 池田さん (小学 3 年生、大阪府)、松倉さん (小学
5 年生、広島県)、内平さん (中学 1 年生、兵庫県)

絹谷幸二キッズ賞 館長賞 多田さん (中学 2 年生、福岡県)

佳作賞 43 点 入選 67 点 合計 115 点

② パブリックアート 「ジュラシックえちぜん」

原画・監修 絹谷幸二

規模 タテ 2.8m × ヨコ 7.1m

素材 ステンドグラス (LED 照明内臓)

場所 えちぜん鉄道 福井駅 改札口横

企画 公益財団 日本交通文化協会

完成 2023 年 3 月

③ 2022 年 講演会

交詢社 講演会 「想像力の鍛え方」 etc.

3. 画家絹谷幸二作品の展示公開、及び、資料・学術研究の提供による美術教育の向上並びに普及啓発活動

当財団は、2022年度（令和4年度）事業計画において、「画家絹谷幸二作品の展示公開及び資料・学術研究の提供を行うことを通じ、美術分野における具象的傾向の絵画に対する理解を促進し、美術教育の向上並びに普及啓発活動を行い、もって我が国芸術文化の発展に寄与する。」としていた。

2022年4月1日以降、当財団は、上記事業計画に沿って、上記の作品の展示公開及び資料・情報提供等の事業を行い又は支援することにつき検討を進めた。なお、本年度においては貸出の実績はない。

II. 当財団の体制・管理状況

1. 会議の開催状況

- (1) 第1回 理事会 2022年11月29日（東京芝とうふ屋うかい）
理事総数3名中3名出席（絹谷幸二、大高保二郎、村上仁志）
監事総数1名中1名出席（梅澤拓）
- (2) 第1回 評議員会 2022年11月29日（東京芝とうふ屋うかい）
評議員総数3名中3名出席（武藤敏郎、島田精一、絹谷幸太）

2. 業務執行体制

本年度は、代表理事絹谷幸二により職務執行が行われ、代表理事の指揮の下、事務局として2名が職務執行を補佐した。

以上のとおり、2022年度（令和4年度）事業報告は、本文にて事業等が詳細に説明されているため、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律第199条により準用される同法第123条第2項、同法施行規則第34条第3項に規定する「事業報告の内容を補足する重要な事項」は本来不要であるが、別紙のとおり、事業報告の内容を補足するものとして、事業報告書附属明細書を任意に作成し、添付する。

2023(令和5)年5月
一般財団法人絹谷幸二美術財団

以上

事業報告書の附属明細書

当財団の顕彰活動の実態を説明するための補足資料として、以下の産経新聞社の記事を引用する。なお、念のため記載すると、本附属明細書は一般社団法人及び一般財団法人に関する法律第 199 条により準用される同法第 123 条第 2 項、同法施行規則第 34 条第 3 項に規定する「事業報告の内容を補足する重要な事項」を内容とするものではなく、事業報告の内容を補足するものとして、任意に作成するものである。

(引用開始)

次代担う若い才能発掘へ 絹谷幸二芸術賞創設

2023/1/30 06:00

<https://www.sankei.com/article/20230130-4Y7IZPWH3JNW5NX45DFVF46S3E/>

産経新聞社は創刊 90 周年の節目となる今年、優れた若手美術作家を顕彰する「絹谷幸二芸術賞」(絹谷幸二芸術賞実行委員会、絹谷幸二美術財団など主催)を創設します。日本を代表する洋画家で、文化勲章受章者の絹谷幸二さん(80)の「次代を担う新進アーティストをサポートしたい」という熱意に賛同するもので、美術界のさらなる発展に寄与する才能の発掘を目指します。

対象作家は 40 歳以下の日本国内在住の方(国籍不問)で、「具象傾向の平面作品」を公表していることを条件とします。全国の識者(美術館学芸員、大学教授、ジャーナリストなど)が推薦する作家の中から、美術界を長年牽引(けんいん)してきた 3 人の選考委員が大賞(賞金 100 万円)と奨励賞(賞金 50 万円)を選出します。第 1 回の受賞者は今年の秋に発表予定です。

具象表現にスポット

絹谷幸二芸術賞の発案者で日本を代表する絹谷さんは「芸術文化は人間が咲かせてきた『花』。今後も芸術の花を残す人を育てたい」と語るとともに、美術が多様化する中で、いま一度、人間が古来取り組んできた「具象表現」にスポットを当てたいと言います。選考委員は絹谷さんを含め、美術界を長年牽引(けんいん)してきた計 3 人が務めます。絹谷さんの賞創設にける思いと、選考委員のメッセージを紹介します。

――絹谷幸二芸術賞の創設を考えた理由は

以前、具象的絵画に取り組む若手作家を支援する「絹谷幸二賞」を 10 年間実施し、活躍めざましい作家を多く輩出するなど一定の成果を残すことができました。ただ少子高齢化の中で、私が所属する独立美術協会など公募展でも若手の出品が減少傾向にあり、芸術家を志す若者自体が少なくなっている

るように感じます。特に絵画、彫刻といった伝統的分野は表現が多様化する中で、発表の機会が減っている現状がある。今こそこうした芸術に打ち込む若い人を応援したいと思い、(賞を)始めさせていただくことになりました。

――絹谷さん自身、かつて画壇の登竜門とよばれた安井賞を31歳で受賞した

当時はイタリア留学からの帰国直後でいろいろ不安もありましたが、受賞によって背中をポンと押され、美術の世界に入っていくことができた気がします。

そもそも画家は社会との接点を持ちにくい。描くことは孤独で、それも楽しいんですけど、広く周知、報道していただくことで勇気づけられ、一層、創作へのエンジンがかかるのです。

――絹谷さんが「絵画」を突き詰めてきた理由は

映画にテレビ、スマートフォンとこの時代、人は動くものに反応する。でも絵は違う。動くものも、描けば静止する。

人類が他の動物と少し違うのは、動くものに反応するだけでなく、動かないものをじっと見ることができる。 (スペインの)アルタミラ洞窟の壁画などからもわかるように、太古の昔から人は自然を見つめ、表現してきた。その行為が人間の脳を発達させ、文明が生まれた。

私は富士山を長年描いていますが、一見動かない富士山も、日が当たって赤く染まったり、金色に映えたりと季節や時間、気象条件でめくるめく表情を変える。また、石灰岩の成分が雨とともに流れ、やがて魚の小骨などになって僕らの体内に入る…などと自然の循環について考えたり、信仰の対象としての富士山に思いを巡らせたりもします。私はじっと見つめること、その積み重ねで生まれた絵画を通して多くを学んだ。だから今こそ多くの方に、絵をじっと見ていただきたいと思うのです。

――「具象」にこだわるのも、人間の表現の原点を見つめるためですか

そうです。デジタル全盛で数字の利益ばかりを追い求めがちなこの時代、人間として本来もっている力に立ち返りたい。賞の対象を平面作品としたのは、完全に絵画の範疇(はんちゅう)に収まらない表現でも、人間の根本的なありようを見つめる作品なら良いと思うからです。

アトリエで制作する絹谷幸二さん＝東京都世田谷区(桐原正道撮影)

――賞に期待することは

私は昭和18年に奈良で生まれました。先の戦争の終盤、文化財の多い奈良や京都が大きな爆撃を免れたように、芸術文化には戦いや文明の破壊を抑止する力があると私は信じたい。

芸術文化は、誰かが簡単に踏みにじることができない、人間が咲かせた花です。私は80歳になりましたが、賞を通して次代の芸術家を奨励し、この先も文化芸術の花を残す人を育てておきたい。そんなふうに思っています。



きぬたに・こうじ 昭和18年、奈良県生まれ。東京芸大大学院修了。イタリア留学中にアフレスコ（壁画技法）を学び、古典技法を生かした独自の絵画表現で49年、安井賞を受賞した。色鮮やかでエネルギー感あふれる画風にはファンが多く、東京芸大や大阪芸大で後進の指導にも尽力。平成26年に文化功労者、令和3年に文化勲章を受章。日本芸術院会員、独立美術協会会員。

絹谷幸二芸術賞 洋画家で令和3年に文化勲章を受章した絹谷幸二氏が若手美術作家を支援したいとの思いから創設。40歳以下の美術作家を対象に美術関係者からの推薦をもとに候補者を選出し、絹谷幸二氏、島敦彦氏、建畠哲氏の3名で最終選考を実施、大賞1名（賞金100万円、副賞）、奨励賞1名（同50万円、副賞）を決定する。絹谷幸二芸術賞実行委員会、産経新聞社、一般財団法人絹谷幸二美術財団主催、チャーム・ケア・コーポレーション共催、サクラクレパス協力。詳細は同賞HP <https://kinutani-award.art/>にて。

島敦彦・国立国際美術館長 若手支援 第2の「安井賞」

若手芸術家を顕彰する絹谷幸二芸術賞が、産経新聞社創刊90周年を機に新たに創設されると聞き、大変嬉しく、どのような新人が登場することになるのか期待が高まります。絹谷幸二氏は、かつて画家の登竜門であった安井賞を受賞したことが絵を描き続ける大きな励みになったと常々語っておられます。その経験から、次代を担う若手を支援したいという熱い思いを長年抱いてこられました。

賞の対象は、平面とりわけ絵画となります。近年は、映像やインスタレーションなど美術の表現領域の拡大に目が奪われがちですが、古くて新しいメディアである絵画の可能性が汲みつくされたわけではありません。絹谷幸二芸術賞は、平面の新たな未来を開く仕事に焦点を当て、40歳以下のこれからが嘱望される若手の活躍を応援するものです。



しま・あつひこ 昭和31年、富山県生まれ。55年、早稲田大学理工学部金属工学科卒業。富山県

立近代美術館に勤務した後、平成4年から国立国際美術館（大阪）に移り、25年から同館副館長兼学芸課長。その後、愛知県美術館館長、金沢21世紀美術館館長を経て、令和3年4月から現職。

建畠哲・多摩美術大学学長 チャレンジ精神 大いに期待

デジタル技術がさまざまな視覚文化を覆い尽くしている時代にあって、かえって若い世代にはオーソドックスな絵画、それも人体表現を中心とした具象絵画を制作する画家たちが増えてきているように思われます。あえて憶測するなら、長い歴史をもった絵画という形式、絵画ならではの制作のプロセスの奥の深さが、スマホで育ったにもかかわらず、いやそうであるがゆえにこそ、より根源的な創作意欲を誘うものとして捉え直されてきているということかもしれません。

絹谷幸二芸術賞は40歳以下という、これからの画壇を担うであろう画家を顕彰することを目的としています。意欲に満ちた若者たちのチャレンジ精神が、従来には見られなかったような絵画の可能性を切り開く新鮮な息吹を私たちに伝えてくれることを期待しています。

たてはた・あきら 昭和22年、京都市生まれ。国立国際美術館長、京都市立芸術大学学長を経て現職。埼玉県立近代美術館長、草間彌生美術館長などを兼任。専門は近現代美術。ベネチアビエンナーレ日本館コミッショナー、横浜トリエンナーレ、あいちトリエンナーレ芸術監督。詩人としては萩原朔太郎賞などを受賞。

（引用終了）